

〔新刊紹介〕

福田晃・中前正志編

『唱導文学研究』第十二集

山本 淳

一九九六年三月に第一集が刊行されてから二十三年余をかけ、最終巻となる本巻が刊行された。この『唱導文学研究』は、福田晃氏（立命館大学教授・当時、日本文学学会〈以下『本会』とす〉名誉会員）・廣田哲通氏（大阪女子大学教授・当時）を中心に主に関西の研究者が集まり、一九九一年九月に発足した唱導研究会の研究成果をまとめたことを主な目的とし、約二年に一冊のペースで刊行されてきたシリーズである。

当研究会の理念として福田晃氏は、本巻「あとがき」で「折口信夫・筑土鈴寛両先達の後を追って、宗教活動における「唱導」の実態を明らかに、その広がりや究明を目的とする」と振り返っている。これは、仏教寺院等の資料に遺る唱導を、単なる説教・布教の史料として扱うのではなく、そ

の実態を解明することを通して文学そのものの発生・生成を捉えようという壮大な試みを示したものである。そのため、本シリーズは、会員による〔論攷編〕だけではなく、研究会における論読の成果を紹介する〔注釈編〕と未紹介の資料を発掘・紹介する〔資料編〕という三本の柱で構成されており、立体的に唱導の実態に迫ろうとする点に特色がある。本巻においても、宗教活動と文学の関係を多彩な角度から照射する試みに溢れている。本巻で一応の完結をみたとはいえ「唱導文学研究」はまだ幾多の可能性に満ちているといえよう。今後は各々が研究をさらに深めるだけでなく、本書を手に取り興味を持った次の世代が陸続と続き研究の裾野を広げていくことを期待するものである。以下、紙面の都合上各執筆者とタイトルのみを紹介するに留める

ことをお断りしたい。

〔論攷編〕

牧野和夫氏「秀範―聖海」相承（地方拠点寺院蔵）資料の周辺―近時過眼資料

の紹介と展開―

佐藤愛弓氏「比叡山内論義と大衆」

原田信之氏（本会会員）「今昔物語集」と法相宗修験―

児島啓祐氏（本会会員）「堅牢地神説の展開―降魔成道譚をめぐって―」

福田晃氏「『神道集』の法脈―編者の周縁を尋ねる―」

小助川元太氏（本会会員）「『壘囊鈔』の〔神護寺縁起〕―「我邦ハ神国トシテ、

王種末々他氏ヲ雑エズ」―

福田晃氏「馬飼文化と観音信仰―英雄叙事詩としての「田村麻呂」―

二本松泰子氏（本会会員）「近世期における称津氏嫡流の家伝について―新出の称津氏系図を端緒として―」

〔注釈編〕

山本淳（本会会員）「『神道雑々集』下冊八

「大宮本地事」

〔資料編〕

高橋秀城氏「萩之坊乗円筆「鴨長明絵像」

（石川丈山歌賛）について」

大島由紀夫氏「叡山文庫藏『隨身抄』解題

・翻刻（抄出）」

（三弥井書店 二〇一九年一月 二九二

頁 本体価格八、五〇〇円）

（やまもと・じゅん 本学非常勤講師）